

### 第33回ズーム三水会記録

日時：2024年3月20日（水）16時～18時

- ① テーマ：「オウエンの我々への遺言 これから1000年先の社会を目指して」
- ② 発表者：野口幹夫
- ③ 司会：鈴木 岳氏

参加者 11名（敬称略） 團野廣一 野口幹夫 小関 栄 村沢澄子 波治裕美 石塚秀雄

今尾和美 丸山茂樹 鈴木 岳 中村範子 斎藤嘉璋

**報告内容：** オウエンの晩年は当時米国英国を中心に勃興したスピリチュアリズムに参加し、その中で確信を得て1000年の未来社会を描き、我々への遺言とした。このことは理解を得ることができず今日まで無視されている。しかしやがて人類がさらに成長し霊的世界とこの世との不可分な関係を知るようになった時、このオウエンの1000年社会理論を正しく理解できるようになり、実現に踏み出すことになるだろう。

**質疑討論：** 参会者から熱心な質問討議があったが、その一部を紹介すると。

まず本論に対し、驚きと共感の意見が述べられた。

「オウエン協会に一員として彼の研究をしているが、いままで、この本の存在すら知られていない。

またマルクス・エンゲルスの社会主義論を科学的とし、それに対してオウエンの社会主義は空想的とされてるが、それは当たっていない。その言葉はやめるべきだ。実践的な社会主義理論だ。」

発表者回答「その通りだと思います。彼も自分の理論を「神と自然の理論」としているように、神だけでなく「自然」と加えているのは、これが科学的にも証明できることを意味しているのだと思います。今の科学は、魂の存在を否定していますが、それは現代の科学がダークマターを検出できる能力がないためです。200年先かもしれませんが、ダークマターの詳しい説明ができるようになれば、人間だけが持つ「魂」の5次元的存在素性も知ることができ、天国との関係も科学的に理解できるでしょう。その時オウエンのこの理論こそ科学的であったと証明されます」

他に賀川豊彦も熱心なキリスト教信仰を持っていたが、そのこととオウエンとの関係を再確認したいの意見がありました、

また本件とは離れるが、尊徳も人間は肉体だけでなく魂を持つものと述べている、そこは共通している。今後の科学の進展に期待したいなどの討論がありました。

詳しくは下記の録画をご覧ください。

当日の録画のユーチューブ：<https://youtu.be/XAVV8iGPluM>

添付資料 レジメ次ページ

# オウエンの我々への遺言 これから 1000 年先の社会をめざして

2024-3-20

野口幹夫

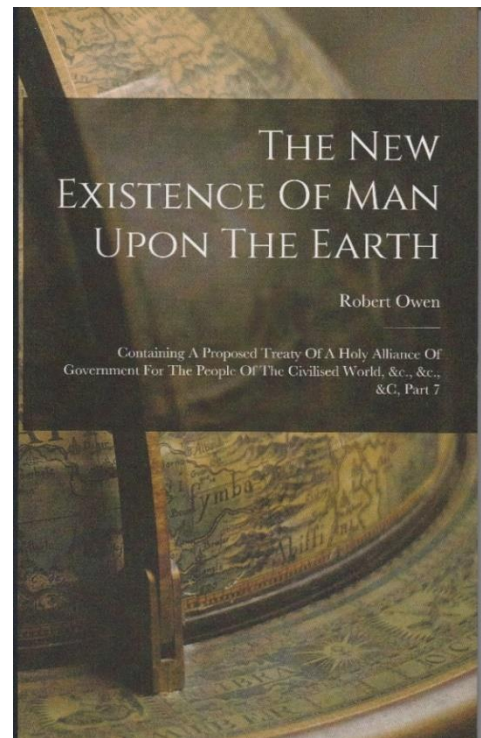
## 緒言

オウエンの晩年はその当時から勃興した米国英国のスピリチュアリズムに参加し、その影響を受けた論説を展開した。それは老衰のためだとか あまりまともには評価されないでいる。私はその心境を彼の人生の輝かしい達成だと見ている。

また彼の壮年期の宗教観を「全宗教の否定」、すなわち現代の無神論者に近いものと誤解されている。実は全人生を通じて熱烈なイエス信仰を維持し、その宗教的理解と情熱が、既存の教会に対する強い批判につながり「全宗教の否定」とみなされることになったが、実はその宗教的信念に基づく人類愛の実践として社会主義的協同組合実験を生み出し、彼の輝かしい人類への遺産を生んでいったのだ。

そしてその必然的な人生の到達点が スピリチュアル交流と天国からの支援によって「宇宙神とつながった幸福な人類の地上天国の建設」への確信となり、それを現在の我々に伝えたくて残したのが「千年王国のスタート宣言」であったのだ。

彼が死の 2 年前の 1855 年に出版した著書 “THE NEW EXISTENCE OF MAN UPON EARTH” 「地球上での人類の新しい存在」を読みほどこ中で、このことを紹介したい。



## 1, この報告を書くに至った経過

わたしが長年加入している異業種交流研究会三水会に、2019年1月中川雄一郎会長が参加され「ロバート・オウエンの思想と現代」を講演されて、オウエンを知り、それ以来関心をもっていくつかの本も読んだ。その一つが上田千秋著「オウエンとニューハーモニー」があり、そこには彼が幼いころにメソジストから影響を受けたことが書かれていた。宗教改革の波がイギリスに押寄せたが、ここではルター流の改革ではなく、カトリックの古い体質そのままのこして、カトリック教皇とは離反して国王が法王となるイギリス国教会が生まれた。実はキリスト教はさかのぼること1500年前、ローマ帝国の国教となったときに、人民の解放のイエス教から人民支配の道具となる圧力支配の宗教に真逆に変質したのだ。聖書は人民から遠ざけられ、聖職者のみが接することが出来、人民は罪の脅し 煉獄 地獄の恐怖にさらされて教会に支配されて生きていた。イエスはあらゆる罪人を救うためにこの世に来て、愛の天国を約束したにも関わらずに反対のことがキリスト教会に支配によってなされてきたのだ。オウエンが生きた時代の英国国教会も その点では当時のローマカトリック教会と同じであった。

英国の宗教改革時代の分派として学生たちが起こしたメソジストは そのような古いキリスト教を批判し、聖書を読みイエスに直接つながった。オウエンは幼いころ親とは違って、その教えを熱心に説くメソジストの活動家の婦人たちに影響を受けることになった。これが彼の宗教観の出発点だったのだ。教会を通じてではなく、聖書を読んで直接イエスにつながり、生涯変わらぬ熱心なイエス信仰者となったのだ。

わたしは人生の半ばでイエスに出会い信仰を得た。昨年三水会で私のイエス伝を書いて発表した。その折私のイエス信仰はオウエンの信仰と同じ道を歩んだのだと気づき、そのことを報告した。[sansuikaiZoom19.pdf](#) (2023-1)

そして今の私も到達したのと同じように、スピリチュアル交流に興味を持っていたオウエンの晩年の活動を知りたくなった。しかしその資料は簡単には入手できなかった、幸いその年から生成 AI が生まれ始めていたので、早速それに聞いて二つの本を教えてくれた。

最初に入手して読んだ本が“THE DEBATABLE LAND BETWEEN THIS WORLD AND THE NEXT by Robert Dale Owen”であった。それを読むうちにその中の記事の時期に 1860 年とありオウエンが死んだ後の年代だと気づいた。なんとこれは息子のロバート・デル・オウエンの作であった。父との共同作業をした彼はスピリチュアル活動も共にしたのだ、そしてオウエンの死の床にいたのも彼だった。だからこの本はオウエンのスピリチュアル活動の様子も知ることができた。

そうしてもう一度別の生成 AI に聞きなおして、今度は本人の著“THE NEW EXISTENCE OF MAN UPON EARTH”1855 に会うことができたのだ。今回はそれを中心に紹介する。

## 2, ロバート・オウエン協会に入会して

岡本先輩や富沢先生の紹介を得てロバート・オウエン協会に入会させていただいた。それを記念して岡本先輩からロバート・オウエン協会年報を送っていただいた。その中に今回報告の内容に関連する論文があった。第 43 号 p143 の野末和夢氏の「ロバート・オウエンの『合理的宗教』の再検討 科学と宗教を結ぶ論理に着目して」があった。ここで野末氏

は、オウエンは「世界の全宗教を否定し、廃棄する」と表明しているが、宗教そのものを否定するのではなく、既存の宗教の誤謬を否定するのだと正しく指摘されている。そして必要な宗教は「合理的宗教」で、幸福をめぐる全人類規模の感情に由来した紐帯の形成を志向するものだと指摘されている。ただしそれがイエスのものとは書かれていないので、何か半科学的な独自の宗教のような印象を与えることになっている。

オウエンの宗教全面批判や「合理的宗教の必要」というのも、背景には、生涯を通じての熱心なイエス信仰がバックにあって、イエスの求めているものと反対のことをしている当時の教会に対する怒りといった身につまされた心情があるのだ。そのような状況下で「合理的宗教」とオウエンが語る内容は、イエスが述べた教え、すなわち「神への愛」「隣人愛」「支配よりの解放」「神の国の建設」をイメージしていたと考えられる。「合理的宗教」といわれるものが、オウエン個人が生み出す新宗教といったことではない。

野末氏は「スピリチュアリズムへの傾倒も老衰に起因するものかどうかは議論が分かれている」と消極的に触れるにとどまっておられるが、彼の熱心なイエス信仰と、イエスを派遣された天の父への信仰を考えると、その信条の延長線上にスピリチュアリズムへの憧憬があったのが自然であり、彼の晩年にアメリカから起こったスピリチュアル運動に熱心にかかわり、そこから人生の集大成として受け入れたのだ。そればかりではない。この書でオウエンが描く人類の未来図千年王国は、彼が開拓したコロニーを設計図としつつ、それが本当に人類の未来として実現する環境は、当時切って落とされた欧米に巻き起こったスピリチュアル運動とそれによって生まれたこの世と神の領域との合体と指導の知見が人類

に広まりつつあることがそれを可能としたのだという信念によって書かれているのだ。

### 3, 千年王国の宣言の書

この書の表題は”THE NEW EXISTENCE OF MAN UPON EARTH including An Outline of the Principles and Government of the Millennial World with an Appendix containing Correspondence and Spiritual Communication“ 「地球上の新たな人間存在 — 千年王国の原理 — 附 スピリチュアル通信と交流」である。

(なお「ミレニアル千年王国」というのは、古くはキリスト教用語で イエスが将来再臨して始まる地上の天国を名付けられたものだ。しかしオウエンは、それをイエスの再臨ではなく、彼の考える「宇宙神とつながった幸福な人類の地上天国の建設」 人類の理想社会の建設への出発という意味に使っている。)

この書の目次は次の通りである。

3-1：序文

3-2：地球上における人間の新たな存在 本文

3-3：ミレニアル政府の概要

3-4：モデル憲法

3-5：移行問題

3-6：結論

3-7：マニフェスト

3-8：付録 スピリチュアル活動の諸通信 5通

### 3-1：序文

冒頭にこの書の目的を明らかにしている。

「今求められているのは、戦争を終わらせ、人格を浄化し、向上させ、有益で楽しい富を余剰に生み出し、人類を団結させ、これから生まれるすべての子供を、誕生前から 地上での死まで十分に世話をする社会制度を導入することである。一そして、このようにして、これまで人類を苦しめてきた悪を終わらせ一 地球上に千年王国の存在状態を導入するためである。」

「それは『神と自然がすべてを作る』のに従うことだ。

新しいスピリチュアルな影響が、社会の精神的能力を開き、発展させ、過去の誤った社会原理と、『神と自然が作る』良い状態との違いを理解できるようになった。そこでやっと、法、宗教、政府、人格形成教育、結婚、商業、などの社会的取り決めにおいて。千年王国の地上の楽園をスタートさせることができるようになった。」

### 3-2：地球上における人間の新たな存在 本文の抜粋

千年王国は、不変の事実に基づいている。「人間は、その肉体的、精神的、霊的な資質のすべてにおいて、神と自然という目に見えない未知の力によって造られ、この力がこれらの器官、能力、性向を形成し、結合している。

新しい普遍的な宗教、政府、社会の分類、結婚、一般的な社会的取り決めが、人類にまったく新しい条件を形成する。この条件は、長い健康的な人生を通じて、個人の責任なしに、すべての人が団結し、善良で、賢明で、幸福になることを強いるものである。



この未来の新しい存在を開始し、千年王国を現実のものとするための手段は、今、余すところなく存在している。

現在が 将来の千年王国、すなわち真のキリスト教的な生活、すなわち世界の先進的な精神が入ろうとしているその生活の成長に必要なものである。それは、イエス・キリストによって異教徒や未開発の世界にも部分的に告知され、開かれたキリスト教の精神、原理、実践を創り出すことのできるものである。

キリストは、神の真理の第一の到来であり、真理の第二の到来があることを約束したのである。「互いに愛し合いなさい。このことによって、あなたがたはわたしの弟子であることを知るであろう」

これこそが真の千年王国であり、世界の国々がそこに入ろうとしている。それゆえ、われわれ千年王国人は、人々の間に普遍的な平和を確立し、真のキリスト教の愛の宗教を、精神、原則、実践において実行する。

このキリスト教の普遍的な慈愛と愛のシステムこそ、地球を覆い尽くし、すべての国や民族が十分に満足して採用できるシステムであり、人間の間には平和と善意を確立し、地球を地上の楽園にすることのできるシステムなのである。これは統一体であり、ひとつのシステムを形成しており、統一体とその効力を破壊することなく、どの部分も省くことはできない。

この宗教は神と自然の法則にのみ基づいている。

これらは、神と自然が不変の事実を通して宣言したとおり、あるいは宇宙の精神とその物質的な覆いとが一体となった神秘的な存在である。

地上での存在において、あなた方がより高い段階へと進むべき時が近づいている。私は、より明白な物質的証拠とともに、私の支援スピリットをあなた方に送り、その吉報をあなた方に告げ、新しい物質的・霊的知識をあなた方の中で徐々に発展させることによって、その準備をさせます。これらの条件は、誕生から、いわゆるあなたの死まで、人生の全事業を網羅し、あなたの現在の物質的肉体の死は、より純粋な霊的存在への入り口です。

### 本文への追記：

19世紀における「発明、発見」は並外れたものであったが、最も驚くべきものは、1847年に米国のロチェスターで始まった新しい霊的現象であった。現在では、これらの霊的なコミュニケーションが、地上における理性的で幸福な状態に向けた人類のあらゆる進歩の中で最大のものであることは明らかである。

これらの新しく驚異的なコミュニケーションとデモンストレーションは、日に日にその規模と力を増しており、過去のあらゆる時代の驚異をはるかに超えています。それらは、世界の人口を 無知から知識へ、憎悪と反発から愛と魅力へ、そして不幸から普遍的な理性的幸福へと転換させるために到来している。

一流の人々の霊は（地上に生きている間）、この地球上の創造の段階的な過程におけるこの偉大で輝かしい結果のために、世界の人々を準備するために、現在深い関心を持ち、絶え間なく活発に活動している。これらに、世界の人々は驚くだろう。神の力は地上の思い込みの無知を克服する。

巻末につけた付録で述べられていることは事実であり、一般大衆にその価値を示すもので

ある。これらは、米国で それなりの地位と高い評価を得ている霊媒たちが 私に宛てた手紙から成っている。手紙に書かれた通信は、霊によって、彼らを通して私になされたものであると述べている。

私は、このような霊的通信に反対する人たちに対し、これらの書き手たちがこのように私に手紙を宛てた動機を、説明し、彼らがどのように通信をしたかを説明していることに感謝する。この問題は今や、一般市民や公的機関の最もオープンで公正な調査を必要とするほど、興味深いものとなっている。

### **3-3：ミレニアル政府の任務**

この理性的な政府は、統治される人々の幸福にのみ注意を払う。そのために、人間の本性とは何か、その組織と誕生から死までの存在の法則、そのように形成され成熟した存在の幸福に必要なものを恒久的に確保するための最善の手段を考案し、実行する。

### **3-4：モデル憲法**

千年王国または理性的宗教の原則と実践として、まず人智では知られざる永遠の原因が存在すると明記する。そしてそれに対する心や良心の自由を保障する。

すべての人は、生涯を通じて、最良のあらゆるものを平等に与えられる。

出生から成人に至るまで最善の方法で教育訓練される。

結婚は両性の本性の共感から生じる。

現在不正や犯罪の原因となっている私有財産は存在しなくなる。個人的な報酬も罰もなくなる。

人口の分割をする。一つの社会は、男女子供を合わせて 500 人から 3000 人とする。最大数を超えると別に独立させる。

それらの社会は連合的に結合し、やがてはヨーロッパ全土に広がり、やがては世界の他のすべての地域に広がり、すべてを一つの大きな共和国に統合し、一つの利害を持ち、次第に一つの言語を持つようになる。各自治体の運営にあたる協議会は、対内部門においては、40 歳から 50 歳までのすべての会員で構成される

50 歳から 60 までは、対外の職務を行い、余剰生産物を交換、あらゆる種類の発明、発見、改良に関する情報の授受導入を任務とする。

60 歳で役職を免除される。

コミュニティの中心に正方形のセンター建物を置き、周りに住民の住居を最善の方法で配置される。広場を置き製造や交流のための動力が配置される。

### 3-5：移行問題

非合理的で有害な現在の政府は、徐々にこの理性的な政府に移行するための移行政府が必要である。

ヨーロッパの全住民を再教育し、徐々に新しい場所に移すための移行措置が、今、必要とされている。これを平和的かつ合理的に確立するためには、現在の政府の形態がどのようなものであれ、既存の政府から発せられるべきである

まず失業者全員を市民軍に入隊させ、再教育を受け、社会を再編成するために必要な新しい取り決めや生活のあらゆる業務を優れた方法で遂行する。

### 3-6：結論

真理と真の知識を新世代の人々に教えることは、人間が携わることのできる最も重要な職務である。なぜなら、それがうまく適切に行われれば、世界の人々から誤りと悪を取り除き、地上に真の千年王国時代の生活を導入し、感情と関心において人類を団結させ、教育と条件のあらゆる不平等を破壊し、こうして人類の恒久的な兄弟愛を最も堅固な土台の上に確立するからである。

では、このような人類の教師とは誰なのか。それは、自分自身と常に一体であり、既知の、あるいは知りうるすべての事実と一致する真理を人間に教えることである。地球上のすべての人々が最初に求めているのは、これらの神の真理を教えるべき人々を指導するための標準学校である。

1856年10月10日、

### 3-7：マニフェスト

主権者、政府、そして人民の皆様へ。

千年王国、すなわち「人間の新しい存在」の実践への普遍的な導入について。

#### 第1部

千年王国がある一点から始まり、その一点から徐々に円を描くように広がり、地球を一周するまで 絶えず拡大し続ける時代が、天地創造の正当な秩序の中で、その規則的な進行の中で 到来したのです。

千年王国の精神は、私たちの人類に対する慈愛と愛の実践である。すべての人の人格は神と

自然と社旗によって形成される。誕生から終わりまで、すべての人を良好な条件だけで形成する。

## 第2部

現在の闘争的で利己的なシステムからミレニアムシステムへの移行を破壊を伴わないで進行することです。公共の報道機関にその精神を浸透させ世界中にひろめること。政府と人民が団結すること。もし政府がこの光暉ある任務を果たさなければ人民の団結で。

## 第3部

宗教当局者と政府はこの新しい任務に協働するべきだが、それが果たさない時も、怒りや暴力 復讐の行為はしてはいけない。

千年王国時代の真の精神、原理、実践を身につけさせれば、知識、卓越性、幸福への道は平明で容易なものとなり、地上にこの新しい存在の状態を生み出す条件を作り出すことは、すべての人にとって楽しく愉快的な毎日の仕事となる。

人格の形成に関する真の原則と、全人類の周囲に良い条件を形成するという真の実践を採用することで、この偉大な仕事は完成する。

ロバート・オウエン

### 3-8：付録 スピリチュアル活動の諸通信 5通

オウエンのスピリチュアル活動の一端を知ることができる通信が5通収められている。

3-8A 戴冠した天使と名乗る未熟な霊がオウエンに励ましのメッセージを、霊媒ホックリー氏を通じて伝えた。

それにオウエンが返答し千年王国の考えを詳しく述べた

3-8B 米国 NY 在住の学者アトウッド氏がオウエンへの手紙。

宇宙の創生から人類までの歴史を語る。現代の宇宙論と進化論とたがわない理論を説明し、  
霊界の交流とその影響についても語る。

戴冠天使は年若いうちに亡くなった人の霊で未熟な霊だとも批評。そのほか霊界との交流の  
心得も説く

3-8C オウエンの支持者アメリカのカルバートソン氏からの手紙でコベットなる霊が霊媒  
フレンチ夫人を通じて語った言葉を紹介している。

霊界では高級霊たちが人類の進歩を見て会議を開いている。オウエンを支援し、オウエンの  
生涯が終わり霊となる時、霊界で兄弟となろうと励ましている。

3-8D デトロイトの友人ブラウン氏を通じてトーマスペインという霊からの通信

オウエンが「不滅の光」を発見したことを喜び共感する人が多い。一つの霊の言葉を伝える、

「あなた自身が高次の媒体である。霊の声があなたの魂の中で響いているでしょう。あなた  
が選んだ道を進んでください。私たちはあなたと共にある。

3-8E 多数の霊界の人々が集まる大会が 1855/4 に米国で行われる、

そこでジョン・マレー・スピアという霊媒を通じた演説がなされた。

まずこの大会に招集された多数の霊界の人々は、宇宙人類の進歩発展と福祉への努力に深い  
関心を表明した。

この地球の改革は 霊の世界である天と地上の生活との結婚しかないとし、それに至る道を

説いている。

次にこの演説をしたジョン・マレー・スピアという霊媒が、傑出した慈善活動の人として紹介される。霊的作用で病気を治した。遠方から招かれ、その費用が霊界の人たちで設立されている慈善協会が支えてくれた。そしてそのほかにも霊界に様々な地上への協力目的のアソシエーションができていることを紹介している。

#### 4 まとめ

ロバート・オウエンは人生の終わりに、この世の人間と霊界を合わせた地球全体を見張らす高い境地に達した。そしてその高台から見ると、人間を含めた全創造物が愛される存在であり、幸せでなければその存在意味がないと見、現在の地上の人間たちの苦しみの原因も明らかで、それからの脱却が必然で、その先に千年王国への道が開けていると確信した。それは人間が現世を卒業した世界の存在である霊界の高級霊たちがこぞって支援してくれていると確信できた。

その道を この原理を 人間たちが理解承認する教育部隊を作ることが千年王国のスタートとなる。このことを千年かかってやり遂げることを 後世の我々に託して、霊界への仲間入りの幸福感の絶頂のうちに人生を閉じることになったのである。

#### 5 続編としての息子ロバートデルオウエンの証言

オウエンは この著作を出版後 その千年王国実現への道をひた走る。翌年の 1856 には、機関雑誌を創刊し 死の年まで続けた。様々な会合で演説を行い その啓蒙運動を行った。1958 年この種の会議での公演中に倒れ、長男ロバート・デル・オウエンに看取られつつ安



らかに大永眠を遂げ霊界へと旅立った。

#### 5-1 ロバート・デル・オウエンの紹介

ロバート・デル・オウエンは、ロバートオウエンの長男として1801年誕生した、そして終生父オウエンの活動に従った。アメリカにわたり、ニューハーモニー設立に参加したのは25歳の頃である。その後 彼はアメリカで国会議員になり、ナポリ国公使にもなる活躍をしたが、終生父と心を合わせていた。オウエンが故郷の北ウエイルズで永眠した時には 彼が見取った。

今回紹介するこの著作の出版は1860年9月で、父オウエンが無くなった1858年から2年後のことである。その緒言のなかで、「12年まえからこの心霊現象の調査に加わった」と書いている。出版年から逆算すると、それは1848年となる。それはオウエン77歳 彼のもっとも輝いたアメリカのニューハーモニー活動を終えて20年たった頃で、様々な公的活動もそろそろ落ち着いたころのことである。先のオウエンの著作で「1847年に米国のロチェスターで始まった新しい霊的現象」と書いている翌年のことである。彼の年代記録にはこのことの記録はないが、この息子ロバートデルオウエンの証言から、彼らは心霊研究を、この事件の直後から始めていたと推定できる。そしてその5年後1853年(82歳)の時 オウエンは心霊主義に帰依したことを公表する「人類の将来」を刊行している。

そのロバートデルオウエンが1870年代に発行した *The debatable Land Between This World And The Next*(この世とあの世の間の論争中の領域 )という著作は入手できた。父オウエンとともにスピリチュアル活動に参加した彼が、その後もその活動をつづけた様子が報告さ

れている。その概要を紹介する。

## 5-2 Preface 前置きとした短い文でこの本の目的を書いている。

当時の天文学の発見である天王星が 当初恒星とみられ、摂動理論により惑星として発見された快挙を 科学の成果と引用した後、イエスキリストが、聖書で語る様々な奇跡とそれらが弟子たちによって継承されたことが、自然の法則によっているならば、現代でも発現されるはずであるとして、それが現代に起きている霊的現象なのだとしている。

彼は父オウエンとともに 1848 年から、この現象の本質の解明を手伝おうと努めてきた。

## 5-3 この本の主な内容

序章として「プロテスタント聖職者へのメッセージ」と題して、当時のキリスト教世界の大事業であったカトリックとプロテスタントとの争いを、スピリチュアルな世界の認識という尺度でその差を分析している。カトリックはイエスが行った奇跡を事実として認め、プロテスタントはそれに重きを置かない、中にはそれは単なる寓話に過ぎないとして否定する論者もある。宗教改革が始まった頃はプロテスタントが 大きなエネルギーで欧州を席卷したが、やがて勢いを失いカトリックが巻き返している状況を述べ、プロテスタントは科学の先端で受け入れられようとしているスピリチュアリズムが台頭している時代の空気についていけないと批判している。またカトリックも霊的現象がイエス時代に限られるとか、もし今の時代に起きるとしてもそれは教会内の秘跡に限られると主張し、霊的現象が広い社会現象になっていることに目を向けないと批判している。

以下 BOOK1 から 7 までスピリチュアル活動の諸相を詳述している。

多くは Robert Owen 没後息子の体験談であるが、その中で彼の父すなわち Robert Owen のスピリチュアルな体験記を語っているがあるので、紹介しよう。

婚約者の出現。

p 440-442

グレース・フレッチャー

1854 年の10 月、父はロンドン近郊に住む知人の若い女性、ミス A を訪ねました。霊媒としての彼女の力は、プライベートな友人のみに知られていますが、最高級のもので、彼女は、現代のスピリチュアリズムが登場する何年も前の幼い頃から、習慣的に霊を識別してきました。他にも、驚くべき種類のさまざまな現象が彼女の目の前で起こります。

父は、彼女が何か気分のすぐれぬ様子でソファに横たわって読書に熱中しているのを見つけました。彼が入ってくると、彼女は本をわきに置きました。立ち上がろうとしています。しかし彼は彼女に残ってくれるよう頼み、霊的現象を調べる機会を期待して来たので、ラップができるかどうか確かめるためにソファから遠くないテーブルに一人で座るつもりだと付け加えた。彼はそうしました。そしてしばらくしてラップが聞こえましたが、Aさんはテーブルに触れませんでした。

父は尋ねました。「あなたは何か霊の存在を知覚できますか？」

「はい」と彼女は答えた。「私には、若い女性の霊が見えます。」

「彼女の名前を教えてくださいませんか？」

「いいえ、彼女は私にその名前を教えてくださいはありません。ただし、私が座ってこの本を読んでいるときに彼女を何度か見たことがあります。」そして彼女はそばに置いた本を指さしました。

「でも、もしかしたらラップでその名前を知ることができるかもしれません。」

そして事実、すぐに「グレース・フレッチャー」と綴られました。

「何と！」と父は言いました。「私の旧友、グレース・フレッチャー？」

「グレース・フレッチャーって誰ですか？」若い女性は尋ねました。「その名前は今まで聞いたことがありません。」と

「彼女を知ることはできなかつたでしょう、彼女は30年か40年前に亡くなったのですから。私は彼女をよく知っていました。私は、彼女ほど、美しく、道徳的で知的な人には、これまで会ったことがありませんでした。」

「それは稀なことですよ」と若い女性は言った、「この本を読むために座っているときは、ほとんどいつも彼女の魂が見えるのですが、そのときだけです。」

「あなたが今まで研究されてきたことは何なのか教えてください？」と父は尋ねました。

「トーマス・ブラウン博士の精神哲学です」そして彼女は私の父にその本を手渡しました。

彼はそれを受け取り、「何と奇遇だ！ - 何と素晴らしい偶然だろう！」と叫んだ。

「そこに 何と素晴らしいことがあるのでしょうか？」

それから父は、ずっと理解していたように、ブラウン博士とミス・フレッチャーはお互いに深く愛着を持っており、二人の親密さはやがて結婚へと進んでいくと期待されていたことを説明した。「しかし、彼女は19歳で亡くなった」と彼は付け加えた、「かわいそうなブラウンは、決して立ち直れなかったのだと思います。なぜなら彼は、彼女の死後 3年か4年しか生きられなかったからです。」

グレース・フレッチャーは、私が彼女について聞いた限りでは、父の追悼に値する人物で、エディンバラの文壇で長らく注目されていた才能ある母親の娘でした。その母はその後13~14年ほど経ち、非常に高齢で亡くなりました。私はその家族をよく知っている女性を通じて、ブラウン博士とミス・フレッチャーの間には「おそらく積極的な婚約ではないが、確かに非常に強い相互愛着が存在していたことがよく知られており、彼らの友人たちはそうだと確信していた」と確認した。彼女は 1816 年頃に亡くなり、彼は 1820 年に亡くなりました。※

私はこの若い女性自身から上記のことを聞きました。\*\* そして、その確からしさを私は確信します。私の子供時代の思い出の一つは、グレース・フレッチャーの死の予期せぬ知らせが父に届いたときの父の悲しみです。

この事件で重要な点は、この若い女性幻視者が、父から知らされるまで、ミス・フレッチャーの名前も聞いたこともなかったし、その女性とこの本の著者との人生のつながりについてまったく知らなかったということです。そしてその本を読んでいると常にその霊が現れたということです。

※壮年、四十二歳。彼はエディンバラ大学の道徳哲学の教授でした。上で言及した彼の有名な『人間の心の哲学に関する講義』は 1834 年に第 8 版に達しました。

\*\* 1859 年、私はロンドンの Lady B—'s で彼女に会いました。そこで彼女はいつも歓迎してくれました。彼女の友人たちは皆、彼女のことを最高の言葉で話しており、私自身も数か月間彼女と知り合いになったことで、彼女の知性と誠実さについての私の意見が裏付けられました。